

幕末明治の写真師列伝 第百十六回 宮下欽 その三十四

「四月三日 晴天

一、朝第九時半宮下事務局へ去々月中借[澳]取過之金子之内、五拾円相納む 但小野氏、取扱外ニ去年年中、先生御上京之節之旅費[被]下、残り六拾一円七銭[有之旨ニ付]、右之内へ御差引被成下候様相願、午後第一時過帰ル、宮下事務局へ行道、石川屋へ硝子註文致し候所、大判六枚持参ス、○朝第十時頃吉五郎来ル、日光一昨一日ニ帰り候旨、且おてふ様至極御達者之旨申出ル、午後第五時過帰ル、○蛭子氏（註：蛭子末次郎のこと）并御新造同第六時頃御出、夕飯出ス、同第八時頃御帰リ、○同第七時半頃斎藤氏来ル、今般入塾致し度ニ付[身]請書持参ス、文面左之通、

[斎藤鉄太郎入門請状書写]

記

宇都宮県貫属士族

庫人倅

斎藤鉄太郎

当西拾八才

(修行)

右之者親類ニ御座候所、写真執業致度ニ付、御入門為仕候上者御規則堅ク為相守可申候、万一此者ニ付如何様之六ヶ敷義出来候共、拙者引請、貴殿へ少も御苦勞相掛ケ申間敷候、且病氣等之節ハ拙者方ニ而養生為致可申候、為後日一札仍而如件、

酉四月三日 小石川掃除町（註：御欠カ）

三百七拾六番地 南間孫一郎㊟

横山松三郎殿

（註：南間孫一郎は、元薩摩藩士、博覧会事務局十等出仕・南部陳のこと。後に外務省へ出仕（北京公使館書記）する。斎藤鉄太郎のその後は詳細不明）

「右持参ニ付承知之旨申候所、明後五日より参り度旨ニ付、是亦承知致し遣ス、無程帰ル、○孝太郎来リ、例之通終日細工所之細工致ス、」

「四月四日 晴天風吹

一、蛭子氏駿可台方[西]両国へ御引越ニ付、午前第九時頃方竹藏兼而御手伝御頼ニ付行、今日兼而御頼リ申置候家具左之通差上ル、釜一ツ・鍋一ツ・入鉢并棒・切溜四ツ組一組・箱一ツ・米櫃一ツ・飯櫃一ツ・茶漬茶碗三ツ組・坪二ツ・平三ツ・小皿十五・焼物皿二ツ・片ローツ・雪平一ツ・茶坪一ツ・ごとく（註：五徳）二ツ・炭取一ツ・しんちう（註：真鍮）金たらい一ツ・まな板一枚・茶笏一ツ・午後第二時頃宮下、右御同氏へ金三両移徒（註：わたまし）御口（註：口は文字不明）祝儀として先生御名代二持参ス、同第八時過宮下・竹藏一同帰ル、○先生并松藏、午前第九時過兵学寮へ写真ニ御出被遊、午後第三時前御帰リ、種板四枚御出来ニ相成、○おきつ様・おけい様午後第一時過御出、おきつ様同第 頃（註：「第 頃」の、真ん中は空白）越ヶ谷へ御帰リ、おけい様夜御泊リニ相成、○孝太郎来リ、半日細工所之張付仕事ス、○午後第十二時前西田氏来ル、即時おおけい様一同ニ帰ル、

（註：「おおけい様」は「おけい様」の誤字）

「四月五日 曇 午後第三時頃方雨降

一、午前第八時半頃松藏兵学寮へ写真ニ行、午後第四時半頃帰ル、種板七枚出来ス、○午前第八時半過宮下租税寮へ行、去ル二日註文有之富岡之写真一部持参シ、左之通書面差出ス、

[大蔵省租税寮宛受領書写]

記

一、金百七拾一円 富岡景色製糸所四ツ立判

写真十八通

但一通拾九枚、一枚ニ付

代金五拾銭宛、尤台紙無

右之通代金御払下ケ被成下、正奉請取、以上、

明治六年四月

横山松三郎

租税寮

代 宮下 欽㊟

御役人中

右差出、御下金、銀行之切手ニ而有之、銀座町銀行会所へ行、金子と引替致し、同第十二時前帰ル、○午後第二時前、武助病氣深察（註：診察のこと）頼ニ行、尤医師ハ赤坂住居ニ付、今夜実家ニ泊致し明朝可帰旨申出ル、○板屋又兵衛、紀の国や（註：紀ノ国屋）孝四郎、広島や（註：広島屋）兵五郎来ル、板屋方蒸菓子一折、広島屋より張口（註：口は文字不明）茶筒ニ茶共到来ス、菓子・茶出ス、右三人帰ル、○彦太郎午後第八時頃帰リ来ル、○午後第二時過玉松方女房来リ、道鶴屋敷外ニ望之人有之候間、御望無之候ハ、外へゆつり（註：譲り）可申、望有之候ハ、百円、ニ而御ゆつり（註：譲り）可申候間[与]申決る、

（註：板屋又兵衛、紀ノ国屋孝四郎、広島屋兵五郎の三人は、写真関係の薬劑や機材の取扱店で、彼らは頻りに通天楼に出入りしている）

「四月六日 晴天

一、午前第九時頃松藏深川へ行、○同第十時頃武助帰ル、○同時過浅沼や（註：屋）方代人来リ、過日買上候写真鏡之代金、いつ頃頂戴ニ罷出可然申遣候ニ付、来ル十六日頃可相渡旨申候所、無程（註：ほどなく）帰ル、○午後第一時過竹藏、蛭子氏御宅へ行、同第六時過帰ル、○同第四時過西田氏来ル、菓子・茶出ス、同過大鐘氏来ル、同人へ鶏卵紙二枚、且金二分頼ニ付貸遣ス、尤般西洋蠟製造相始候ニ付、右ニ而返済致し度旨、西田氏同第六時頃帰ル、大鐘氏同第七時過帰ル、○同第六時頃西村氏来ル、今般芝増上寺大門通り源奥院内新聞局同居英国人義耳弁的（ルビ：ギルベット）、兼而写真師ニ候所、今度帰国致し候ニ付而者所待候之[写真]道具不残、一とロニ相払度候間、望旨申候ニ付、先生御入用無御望哉と沙汰致し呉候、尤同氏明後七日ニ者ギルベット之宅ニ九字（時）頃方十一字（時）頃ハ居り候間、其節先生先方之道具御覽に御出被遊候御約束有之、同人へ茶・菓子出ス、同第七時過帰ル、○松五郎殿午後第二時前来ル、同第六時過帰ル、○午後第八時過宮下、玉松へ行、道鶴屋敷之義、外へ御ゆつり（註：譲り）ニ相成候義ニ候ハ、相求、尤金子ハ即座と申ニハ不参候間、右御承知被下御ゆつり（註：譲り）受致し度、尤右ハ先生之御口上、且委細之義先生方御断有之べくと申、無程帰ル、○松藏今夜外ニ泊シ不帰、

この日、登場する「芝増上寺大門通り源奥院内新聞局同居英国人義耳弁的（ルビ：ギルベット）」という写真師が興味深い。この外国人カメラマンはいったいどういう人物であろうか？また、横山松三郎がこのギルベットと会って、写真機材の買い取りの検討をした事実も面白い。

「玉松」というのは、玉屋松五郎のことであろう。本名は朝倉松五郎といい、幕末から明治時代の技術者で、機械式レンズ製造技術を学んで、レンズの製作を行う玉工師であった。

（※「方」は平仮名の「よ」と「り」の合字）

（森重和雄）